

# 虚梁から見た高麗時代末・朝鮮時代初期における多包系建築の正統性

著者	金 碩顯
学位授与年月日	2016-03-24
URL	<a href="http://doi.org/10.15083/00073481">http://doi.org/10.15083/00073481</a>

## 審査の結果の要旨

氏名 金 碩顯

本論文は「虚梁から見た高麗時代末・朝鮮時代初期における多包系建築の正統性」と題されたもので、韓国の高麗時代末から朝鮮時代初期にかけての多包系組物（いわゆる詰組）の特徴を、現存する遺構から探ったものである。著者は組物の構成部材の中で、梁の鼻（表に突出する部分）に着目した。本来、この部材は内側に架かった実際の梁の鼻なのであるが、後には梁が高い位置に架けられるので、外側に見える梁の鼻は「偽物」ということになる。韓国ではこの偽物の梁の鼻を「虚梁」と呼んでいる。この虚梁の使い方に幾つかのバリエーションがあつて、それを精密に観察することによって、建築全体の構成法を読み解く、というのが著者の意図である。

本論文は、大きく二部から構成される。第一部は 5 つの章と結論、第二部は 2 つの章からなり、最後に結章が付く。

第一部では、虚梁を用いた多包系組物をもつ建築を中心に検討した。第 1 章では、虚梁が使われた建築の時代別の地域分布を確認し、また、建築の用途と規模、屋根形式、組物の手先数と虚梁の使用方法との関係を考察した。第 2 章では、虚梁を設けた梁方向別の構成と、虚梁が組物に結合する形式を考察し、虚梁の使用する際に用いられていた構成原理を明らかにした。

第 3 章では、虚梁の外観と内部における意匠を考察し、虚梁を通じて意図した計画を明らかにした。第 4 章では、虚梁と梁架構との関係、特に空間の計画に合わせるために用いられた梁架構を類型別に分け考察を行った。そして、虚梁を設け意図的に表現しようとした、模範となる建築の梁架構の形式や特徴を検討した。第 5 章では、第 1 章から第 4 章までの考察から得られた虚梁を用いる作為の意図を取りまとめ、虚梁の発生した原因を考察した。その結果、正統的な多包系建築の修辭的な表現と特徴を推定した。

第二部では、虚梁を用いた建築と虚梁をもたない多包系建築との比較考察を行った。第 6 章では、高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築における組物を考察し、造営の際に模範となった組

物の構成形式を分類した。そして、正統的な組物の構成形式の原理を明らかにし、最古級の多包系建築に使われた組物を推定し提案した。第7章では、梁が組物と結合する形式を考察し、結合類型別の正結合の形式を明らかにする。これを通じて、高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築の梁架構の構成的な特徴を分析した。

結章では、本研究の目的である、高麗時代末から朝鮮時代初期における多包系建築の特質を論じる。そこでは、以下のように本論文を総括している。

多包系建築では、梁の全ての方向に虚梁が用いられている。つまり、内部の梁架構に拘わらずに、斗栱（平斗栱と隅斗栱）に梁の木鼻を出し、組物廻りの構成と意匠に一貫性を与えようとした。ようするに、虚梁を使用した主たる理由は、多包系建築の外部表現において、規範を変更させないためであった。

規範となる外部表現として、組物の構成形式を見ると、一手先から四手先の組物まで、一定の原理が用いられていることである。その原理は、外側と内側の各手先において、最外郭の手先とその内側の手先に秤肘木を組み、それより内側の手先や柱真には通肘木を組むことである。このような組み方は、12世紀頃の鳳停寺極楽殿の唐家の組物で確認でき、虚梁を用いた建築の組物にも、その原理は継承されていた。

また、正結合の形式として梁と組物が組まれた意匠も、規範となる外部表現に含まれている。梁と組物との正結合の形式類型は、出桁受通肘木を基準に、梁が組まれ木鼻を出す位置より、〈A類型〉と〈B類型〉に分けられ、虚梁と組物との結合も、結合類型ごとの正結合の形式に従っている。

規範となる外部表現が存在したのは、定型化された構造と意匠を整えた多包系建築、つまり、造営の際に模範となる正統的な多包系建築（宮殿の正殿だろう）が成立していたことを意味する。虚梁を持つ14世紀以後の多包系建築の組物は、12世紀頃の鳳停寺極楽殿唐家の多包系組物の構成を継承していることから、12世紀から13世紀には正統的な多包系建築が成立していたと推定できる。

虚梁の発生は、多包系建築において、梁と組物が組まれる「正結合式の梁架構」から来る制限性に起因した。平斗栱に梁を掛け、梁頭形の木鼻を出すということが、梁の掛かる位置を側柱列の平面配置に従属させる。また、組物において、手先の数によって、梁の載る段が決まることで、梁の高さを自由に設けられない。さらに、三分頭形で代表される梁頭形の木鼻を持つ梁が、室内における梁の身、そのままの規格で組物に組まれ、その木鼻が出桁を受けることで、組物の外側の手先の数が増えると、出桁の出も長くなるので、梁の木鼻が出桁を受けるためには、さらに大径の長尺材が必要となる。

定型化された外観における表現論理、即ち、正統的な多包系建築の計画論理に対応しながら、「正結合式の梁架構」から来る制限性を乗り越えるための方案として、虚梁が考案されたと推定する。虚梁を用いることで、外部意匠の論理から解放され、室内空間の梁架構を自由に構成できるようになり、建築ごとに要求される個別的な計画への対応が可能となった。

本論文は、高麗末から朝鮮時代初期の実際の遺構を対象にして、「虚梁」を分析して、その多様な実態、内部の梁架構との関係を解明した。この作業は、最終的には失われたもっとも高級な建築（宮殿の正殿であろう）の組物を推定し、これを「正統的」な組物として提案することで、全ての組物がそれに準拠したもの、という定位置を与えられることになった。

従来の、形式分類とささやかな進歩を語るに止まっていた韓国建築の組物研究に対し、規範に対して、逸脱の表現である「虚梁」を正面から取り扱い、新しい理解の方法を示した。その方法を提案したものとして、高く評価することができよう。

よって、本論文は博士（工学）の博士学位請求論文として合格として認められる。